巻頭言「望郷」

Jネット理事　下山敏郎（名立区出身）

私の育った村は、旧西頚城の名立村の最奥の東飛山であった。海辺の名立町までは一六キロもある。上越市に合併してほっとしているが辺境であることには変わりない。

子供心で思ったことは、あの頃の町は遠い遠いところであった。年に一回も行けるかどうかであった。一方、分教場から見える景色は子供心にも開けていて雄大であった。分教場の正面にはいつも真白に雪をかぶった火打山が肩をいからしてすわり、その右には、焼山、左には妙高があった。今でも素晴らしい景色と思っている。

父母は分教場、上名立小学校の教員であり、住居は分教場の隅にあった。雪の降る半年間は本を読むばかりであった。分教場の二階の小さな図書室の本を読みつくし、部落の青年団の図書館の本も読み出した。「南総里見八犬伝」からはじまり、大人の本も読みつくした。早熟であり、物思うことも多く、感受性も強かったと思う。

春は山菜採り。近くで何でも沢山採れた。夏は名立川でキュウリを齧りながら水遊び。水量も多く綺麗で「かじか」や「はや」がてぬぐいで面白い様にとれた。秋は山芋掘り。山路の土手にはあけびが沢山ぶら下がっていた。山菜の宝庫であった。

あの頃、子供達は世間から隔絶されていて名立谷から見上げる空の広がりだけが自分達の全世界であった。戦争のはじまる前の平和な時代であった。たんぼの土手に寝転んで空や山を眺めてよく口ずさんだ。

「山のあなたの空遠く、
幸いありと人のいう、
ああ、われひとりとめゆきて、
涙さしぐみ帰りきぬ、
山のあなたのなお遠く、
幸いありと人のいう。」

小学校四、五年の頃の夢多い多感な頃であった。

飛山と下瀬戸部落の中間地点に島田河原という場所があり、四、五本の木が立ち、小さな観音様の石があった。島田河原のおせんちゃんの幽霊の出るという場所である。盆踊りの好きなおせんちゃんだったが、ある年、大洪水と地すべりで家が流され、おせんちゃんも死んでしまった。盆が近づくと、おせんちゃんはゆかたと白いてぬぐいをかぶり、夜な夜な踊るのだという。分教場から上名立の本校に通っていた頃、いつも道草をくいながら通ったものだった。しかし、一度もおせんちゃんの観音様に立ち寄った記憶はない。道路からわずか五、六十メートルの距離であったが、子供心にもやはり気味が悪かったのであろう。

後年、ドイツに住んでいた頃、子供達はまだ小さかった。よく島田河原のおせんちゃんの話を聞かせた。家内も子供達も目を輝かせて聞いていた。そして帰国したら一度是非、名立に連れて行ってくれとせがんでいた。何年かたって帰国し、飛山に連れて行った。既にバスが通っていて様子が全く変わっていた。そして、島田河原は見過ごしてしまった。

やはり、故郷は遠くにありて思うものであった。